畑野発　ＪＣとも連携

みんなで佐渡おけさを踊ろう

佐渡全島祭を

地域のネットワーカー　秋山実さん

秋山　実
1967年生、畑野出身・在住。観光業から35歳のとき保険業界へ転身。38歳で独立し開業、有限会社ドリーム代表取締役。むっさんこ塾生、青年会議所理事。

―全島祭を呼びかけているそうですね。

「佐渡は一島一市になりましたが、住民の意識はまだバラバラ。そこで、みんながいっしょにできることをしよう、それには祭がいい、祭を通して、気持も一島一市になろうという趣旨です。各地域の伝統ある祭はみんな個性があっていいが、それとは別に、みんながいっしょにできるものもあっていいと思います」

―どんな祭をお考えですか？

「私は青年会議所（ＪＣ）の理事をしていますが、ＪＣとしては構想段階です。

〝民謡といえば佐渡おけさ〟と言われるくらい、佐渡おけさは有名なのに、盆踊りには踊っても、〝よさこいおけさ〟の祭はあっても、佐渡おけさの祭というものはありません。今では、踊れない人も増えていますから、みんなで踊って、佐渡は一つと感じられればいいのではないでしょうか。

各地域にある灯籠や提灯などを一堂に集めて、みんなで佐渡おけさを踊ろうと考えています。

畑野の地域づくりの会で昨年、街灯がない地区に吊灯籠を点けた。畑野小学校の全生徒が二枚ずつ絵を描いて作り、とても好評だったんです。そこで、今年はそれをもっと拡げようと調べてみたら、昔は佐渡でも、〝灯りもの〟をけっこう点けていたらしい。灯りもののイベントがあちこちにあります。各地の灯りを集めると面白いでしょう」

―地域づくりの会とは？

「私はＰＴＡ役員だったんですが、昨年の畑野小学校のＰＴＡの役員会で、地域の人たちに呼びかけて、何か地域に貢献できることをしようという話しが出て、昨年四月、『はたのあんぜんあんしんさわやか地域づくりの会』を発足させました。〝犯罪のない明るい地域、明るいまちづくり〟を掲げ、最初の活動が防犯灯籠の設置と決まり、どんな灯籠にしようかと考えていたときに、八月二五、二六日の安寿天神祭で、『むっさんこ塾』が絵灯籠を飾っていたのを見て、私に声がかかった。というのは、私が絵灯籠の絵を描いていたんです」

―絵心があるのですね。

「絵やイラストは好きなんです。ちょうど転職した頃、絵灯籠に出合った、三五歳のとき。それまでは仕事一筋、特に夏は観光シーズンで祭どころではなかった。久しぶりに地元の祭に顔を出したら、高さ一八〇、幅一二〇センチくらいの絵灯籠がずらりと並んでいる。それを見て、『これなら、私も描ける！』と、すぐに『むっさんこ塾』に入りました。

むっさんこ塾では、秋田県の湯沢市に研修旅行に行ったとき、『七夕絵どうろうまつり』の通りを埋め尽くしていた絵灯籠を見て感銘を受け、うちでもやろうということになって、翌年の安寿天神祭に、絵灯籠を二〇基借りてきて並べたのでした。

絵は得意なはずだったのに、やってみると、これがなかなかうまく描けない。染料や紙の質が違うのです。そこで湯沢市へ二回足を運んで、伝統技術を習得してきました。以来、むっさんこ塾は絵灯籠を安寿天神祭に展示しています。年々腕が上がって、きれいに描けるようになってきましたよ。

―むっさんこ塾はどんな活動をしているのですか。

「平成二年に発足したグループで、まちづくり関係の学習会やさまざまな分野の講演会を開いて勉強したり、コンサートなどを開催したり、かわら版を発行したり、活発に活動していたそうです。市町村合併を控えて、勉強会・議論もした。研修旅行も毎年しています。絵灯籠は平成一五年からです。

―秋山さんが結び目になったのですね。

「むっさんこ塾とあんぜんあんしんの会とＪＣが結びついた。畑野では、若い層が動き出していますね。ＪＣは全島組織ですが、ここも若い。

灯りもののない地区のみなさん、絵灯籠を飾りませんか。描きたい人には教えますよ。それを全島祭に持ち寄りましょう。湯沢市の人たちも、佐渡で絵灯籠を拡げてほしいと言っています」

―秋田は美人画でしょうけど、鬼太鼓や文弥人形や大黒踊りなど、佐渡らしさを演出してもいいのでは？

「いいですね、鬼の絵灯籠なんかは迫力が出ますよ」

―一市になっても、「おらが村」意識はおいそれとは変わりません。それぞれ固有の伝統を持つ地区・集落です。本紙も掲げる『バラバラでいっしょ』、いつもはバラバラでも、ここぞというときはごいっしょしましょう。

青年会議所（ＪＣ　Junior Chamber）
若いリーダーと企業家を対象とした組織。「明るい豊かな社会」の創造を目標とした「まちづくり」「ひとづくり」が目的。米国ミズーリ州セントルイスの小さな青年社会活動から生まれ、全米、そして世界へと広がった。国際青年会議所（ＪＣＩ）を中心に各国に組織があり、日本は1951年に加盟。佐渡青年会議所は1973年、全国で529番目に創立、会員は現在26人。全国には743の青年会議所があり、約4万6千人の会員が、ボランティアや行政改革などの社会的課題に取り組んでいる。また各国が連携し、世界を舞台にさまざまな活動を展開。20歳から40歳までという年齢制限が、組織を常に若々しく保ち、行動力の源泉となっている。

箱めがね　12

魚類編　1

福嶋　徹夫

マンダラ物語（1）

金持ちを見くびってゆく初鰹　柳　多留

金持ちはかえって魚屋に当てにされないと、宵越しの金を持たぬ江戸っ子の庶民が、威張っている古川柳である。

このようにカツオは庶民の魚として、また「目に青葉山ほととぎす発鰹」の山口素堂の句のように、若葉の候を表象する魚で、松魚とも書く。

ここに言う「マンダラ」とは、実は佐渡の方言で、和名でマガツオ一名ホンガツオのことである。

また別名スジガツオとも呼ぶ。それは体側下方にうすい灰黒色の横縞模様があることからその名があり、無地で黒いソーダカツオと区別する佐渡方言である。新潟市場では、マンキとも言う。

現在では時たま定置網に入る程度で、珍魚の部類になっている。マガツオも幕末から明治期には日本海沿岸にもかなりの回遊があり、太平洋岸と同様なカツオ一本釣りが広く行われていた。

マンダラは八月から九月にイワシを追ってやってくる。

「追っかけられたイワシは群れ固まって、マンダラタカリを作る。このタカリに舟を漕ぎ入れてまず抄く。すくいとったタカリのイワシは舟の中のカメ（生簀になった魚艙）に入れて生かしておく。

そして、二艇櫓か三艇櫓の舟に六人が乗り組み、マンダラの群れを海中に視認すると、「一尺くらいの長さの竹の先を削いだもので、海中をすくっては手早に雨のように海上へまき散らす。さらに時どき生きているイワシをエ（餌）ダモで、すくっては、エドマキといって海面に餌も撒いてやる。

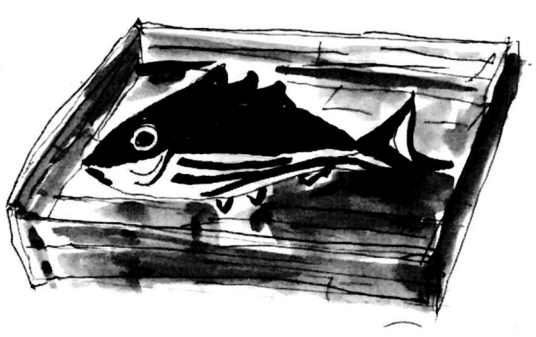
それと共に口々に大声で、ソラクエ、ソラクエと掛け声をかけてはやしたてながら、ハネザオ（釣り竿）を海に投げ込む」

カツオ一本釣りの聞き書きだが、実に具体的で力があり、カツオ釣獲の場面が活写されている。

当時は「五、六百匁から一貫匁（二キロから四キロ）のマンダラが多く釣れたが、カツオは習性として一度餌を喰ったら口を決して開けないので、他の釣り針と違ってカエシ（針先の返し＝ユミとも言う）の無い針を使った」と言う。

この「マンダラ」の魚名の由来については、史実があるので次回に述べよう。（了）

豪快なマンダラ一本釣り



佐渡雑楽　12

歌手の岩崎宏美、良美と益田家と相川諸々の縁

岩崎姉妹のルーツが佐渡相川と聞いていた。二見の稲鯨には岩崎茁子が多いので、その関係者かなと思っていた。ところが最近、関東在住の友人から、「関東相川会四〇周年記念誌」に彼女らのお祖父さんについて触れた文章があると教えていただいた。

それによると、彼女らの祖父の名は岩崎容久氏。二見稲鯨出身で、若くして北海道に渡って苦労され、その後東京の本所深川で木材機械関係の会社を興して成功された方だとあった。

その孫娘が岩崎宏美、良美姉妹である。後年、宏美さんは三井物産創業者益田孝の玄孫の方と結婚し益田宏美となる。益田孝は御存知の通り佐渡相川出身である。したがって、相川出身の岩崎容久氏の孫と同じく相川出身の益田孝の玄孫が結婚したことになる。

ここでちょいと話を面白い方向に持って行きたい。

宏美さんの夫は三井物産ではなく、その最大のライバルの三菱商事社員であった。この三菱商事の社長、会長を歴任し、終戦時の財閥解体時に三菱財閥代表としてＧＨＱと渡り合った人物が相川関係者にいたことを知る人も少なくなったのではないか。

その人の名は田中完三。相川で田中、この辺りでぴんと来る人がいればかなりの佐渡の歴史通と言ってよい。江戸末期に学問所修教館を開設した田中葵園であり、彼はその曾孫だそうだ。田中完三はルーツである相川を終生忘れず、今も相川に田中完三奨学金がある。

また、彼の『九十五歳の記』にも、後に高名な学者となる野上俊夫等友人四人で酒を飲み、偶然にも全員の先祖が佐渡相川の地役人あったという個所がある。他にも相川金山を経営するのが彼の率いる三菱だったこともあり、陰に日向に三菱の名で相川町に各種基金の提供や便宜が図られたそうである。

さて岩崎姉妹に戻る。姉宏美と言えば、あの透き通った天使のような高音を心地良く思い出す。口さがない歌謡界の重鎮淡谷のり子が、「今の歌手は全く基礎がなってない。岩崎宏美だけはまあまあね…」と言ったとか。妹岩崎良美は、私的にはかの「スクールウォーズ」での演技が懐かしいし、かの『タッチ』の主題曲も彼女の歌だ。

選抜高校野球と岩崎姉妹、これでピンと来る人はさすがにいまい。選抜高校野球の入場行進曲である。姉宏美の『センチメンタル』が選ばれ、ついで『聖母達のララバイ』も。

妹良美は『青春』がこれまた行進曲となる。さすがに姉妹で入場行進曲に選ばれた例はないそうである。

（ダン渡辺@両津夷2）